

軍隊での苦勞 負けじ魂が

粘り強い人生を作ってくれた

兵庫県 橋川 信雄

私は、昭和十四（一九三九）年徴集兵です。生まれは大正八（一九一九）年四月十一日、現在の神戸市灘区森南町、当時の家業は農業でした。しかし、父は早く亡くなってしまったのです。兵隊検査では、第一乙種でしたが、甲種合格者に編入され、昭和十五年四月十日、現役兵として、歩兵第七十連隊留守隊に入営、同日、第四中隊に編入になりました。歩兵第七十連隊というのは、第二十五師団（国兵団）に属し、原隊は、丹波篠山の連隊でした。私の体験をお話しする前に、軍隊履歴は次の通りです。

昭和十五年

四月十日 現役兵トシテ歩兵第七十連隊留守隊ニ

入営、同日第四中隊ニ編入

七月十三日 転属ノ為広島宇品港出發

十七日 大連港上陸

十八日 関東州通過

二十二日 三江省樺川県佳木斯到着

同日佳木斯出發

二十六日 三江省鶴立県梧桐河金廠到着

同日警備

九月一日 移動ノ為佳木斯出發

五日 錦州省錦州到着 同日警備

十月十日 一等兵ヲ命ズ

十一月二十九日 移動ノ為錦州県錦州出發

十二月二日 東安省林口到着 同日警備

昭和十六年

四月十日 陸軍上等兵ヲ命ズ

六月三日〜七月二日 東安省八家子付近ニ在リ野

戦築城特別作業ニ従事ス

十月十日 陸軍兵長ヲ命ズ

昭和十八年

三月二十四日 陸機密第一四六号ニ依リ転属ノ為

東安省林口出発

鮮満国境個們通過

二十九日 歩兵第六十一連隊ニ転属ノ為釜山

港出帆

下関港上陸

三月三十日 和歌山着除隊

## 出 戦 務

自 昭和十五年七月二十六日〜八月二十日 内閣告

示第十九号ニ依リ 国境警備加算一カ月ニ付二カ

月

自 昭和十六年六月三日〜七月二日

善行証書 昭和十八年三月三十日付与

適任証書 同年同日 下士官適任証書付与

七月十三日、転属のため宇品港出帆、ノモンハン事件後であったので、私は第一乙種から現役編入になつて、篠山の歩兵第七十連隊留守隊に入営し、小銃隊で

第一期の検閲を終えました。先程の略歴にもあります如く、大連、関東州を通過し、二十二日に佳木斯に着き、鶴立県、梧桐河金廠着、同地の警備をしたのですが、三江省は国境地域であり、ソ連領と接しているため、緊張の連続でした。まして、私は初年兵ですから、先輩や上官からは、やかましく教育を受けました。

国境地帯では山が国境であり、国境の位置は微妙であります。ソ連と日本とは、それぞれの見解が異なる場合があるから、一触即発の場合が無きにもあらずです。まして、ノモンハン事件後のことですから、我々国境警備を任務とする部隊にとっては、常に神経を使い、いつ戦いが起るかも知れないのだから、なおさらでした。

我々の警備地には、二個小隊が分屯していました。土で作り、屋根は藁葺き、雨をしのぐだけの家屋で、これが点在しています。堅固なトーチカではありません。小隊長以下四、五十人宛分屯しているが、ソ連軍との撃ち合いはありませんでした。先程も申しました

が、ノモンハン停戦後で静かでしたが、全員緊張しておりました。

通行する住民の「良民証」の検査をするのも初年兵の役目でしたから、私は、先輩や分隊長に言われた命令を忠実に実行しておりました。分屯隊の内務班は内地ほど、厳しくはなく、私は、私的制裁など余り受けませんでした。

勤務は動哨で、ソ連側の監視や住民の動向など、移動しながら観察しているのです。動哨の合間というか、同じ勤務は、戦車壕掘りでした。山一つ越えればソ連領ですから、一カ月間、朝・昼となく作業をする。壕は直角に掘るので、敵の戦車が突っ込んで来ても登れないようにしてあります。これを機械ですると敵に見えるので、作業はほとんど隠密な手作業でした。しかし、雨によって崩れたこともありましたが、もしソ連等は、命ぜられるままに作業をしましたか、もしソ連戦車群が一気に攻めて来たとしたら、一時しのぎの壕であったかも知れません。

敵の方も、我々日本軍を監視しているので古参兵に

聞くと、こちらも敵の動哨を監視しているのです。お互いに、敵の動きを観察することによって、敵の配備や、攻撃の事前判断をすることができるわけで、前線では常に警戒おさおさ怠りなしということでした。

九月五日、中西部満州の錦州へ移動し、元張学良軍の兵舎に入りました。れんが建ての派手な兵舎でした。その頃、いわゆる「馬賊」というか「匪賊」が出没したので警戒をしました。満蒙開拓団とか農民を襲撃するので警戒するためでした。そのため先程申した「良民証」を交付していたのです。古参兵は、住民で「良民証」のない者を尋問していました。

十月十日、一等兵になり、十一月二十九日、錦州を出発、十二月二日、東安省林口に到着、同地の警備をしておりましたが、その間日ソ両軍も自重していて撃ち合うことはありませんでした。

昭和十六年四月十日、入営一カ年目の日、上等兵に進級しました。満一カ年で上等兵になれることは、同年兵の中で第一選抜ということで名譽というか、自分

の一年間の行動が上司に認められたことで、階級より、そのことの方が私にとって心の喜びでした。しかし、一選抜ということ、それにふさわしい行動を要求されますから心を痛めることもありました。

国境警備では野戦築城は重要な作業でした。昭和十六年六月三十日から七月二十日の間、東安省八家子付近で、野戦築城特別作業が実施されました。これは、仮想敵国であるソ連に対する、対戦車壕の構築という重要な作業でした。これは、ソ連側にしても同じこと、仮想敵国は日本であったのですから、対日戦には日夜怠ることなく準備していたわけです。

今、当時の資料を見ますと、独乙は欧州で戦争を開始しており、日ソは四月に「日ソ中立条約」を結ぶ。しかし、日米関係は悪化していたわけですから、日本としては国際間での微妙な立場にあったのですから、対ソ防衛は前提だったのです。従ってこの野戦築城に参加できたことは、我が連隊にとっても重要な任務を負ったことだと、今思っています。

私は、十月に兵長となったのですが、満期除隊まで、東安省林口に戻り警備勤務をしておりました。そこで、大東亜戦の開戦も聞きました。

我々は、そのため対ソ戦も有るのではないかと緊張して、国境警備をしていましたが、私の居る間はソ連も攻めて来ませんでした。しかし、大東亜戦争もだんだんと範囲が広くなり、満州からも、強力な師団が南方へと転出する様子が見えて来ましたが、満州へは年配の召集兵や、初年兵が入って来て、私も古参兵の間入りをしました。

年配の召集兵の教育では我々が、助手となり、助教となって教えるので気の毒でした。その人達の面倒を見たので、戦後になった今でも、「夫の遺言」だと言って、蜜柑や何かを送って下さる人もおられます。

そんな温かい御遺族の気持ち、戦友愛と現在の人に伝えたいと思い神戸新聞に投稿したことがあります。その記事は次の通り「発言」欄に掲載されました。

「戦後三、四年ごとに開催している戦友会も、集う

度に一人、二人と参加者が減って行きます。その度に天国に召された苦楽を共にした戦友の顔が浮んだり消えたりするので。

三年前に亡くなった戦友の奥様から、自家製の果実や山菜などが毎年季節ごとに届けられます。ご主人が亡くなられたので心苦しく思っご辞退申し上げますと『主人は戦争中、氷点下三〇度の酷寒の満州（現中国東北部）の兵舎で、初年兵だった主人の寝台の下に貴重品だったようかんやまんじゅうを時々そっと差し入れてくださったあなたの思いやりが一生忘れられないと申ししていました。そして死に際に、家であれた物を一生送り続けて欲しいと言いましたのです』とお聞きし、涙を止めることができませんでした。

小さい思いやりが一生感謝され、永遠の友情につながった喜びにただ感謝するとともに、乱れ切った現在の社会を憂いながら、一筋の清流を見いだした思いがしているこの頃です」

私は警備のためチャムスから南へ、また林口まで上がる等、移動命令がありました。その間警備おさおさ怠りない連日でしたが、戦闘はありませんでした。

昭和十八年三月二十四日、東安省林口発、鮮満国境図門を列車で通過し、歩兵第六十一連隊転属のため、二十九日、釜山港出帆、下関上陸、三月三十日、和歌山で除隊となりました。

その後についてお話をします。私が入営する前に入っていた会社は、日東航空機株式会社という航空機のラジエーターを作る会社でした。研究室で勤務し、B 29の墜落機のラジエーターを研究し、作り替え日本の飛行機に使えるようにしました。

終戦直前、京阪神空襲の時は、日東航空は狙われていたため直撃されました。逃げ遅れた人は爆死していました。米軍から落されたビラに、京阪神地図を拡大したものがあり、何月何日に爆撃すると、川西航空・日東航空が書かれていました。

工場には直撃弾、民家には焼夷弾と区別して落す。

その間、グラマンを機銃掃射するから、どこの家でも防空壕を掘っていました。私は焼夷弾でやられた人を救護し、学校の救護所へ運びました。

戦地の兵隊は自分で戦えるが、一般市民は武器もなく、逃げ遅れた人は爆死しました。神戸の三宮の溝という溝に死体が、子供を背負っている母親もいました。戦場も大変だが、戦地で被害を受けなかった人もいます。私は内地で軍需工場にいたから、空襲で九死に一生を得ました。死んだ人は犬死にだったのか。

戦友会で、話を聞くのですが、苦労した人もいますし、楽だった人もいます。内地の空襲の苦しみもある。戦地で残した、死ぬ人を置き去りにしたことを、未だに悔やんでいる人もいます。

私の家の近所は皆焼けましたが、不発で助かった家もあります。近所では十何軒もやられたのですが、二、三軒は残りしました。畑の中にあつた家でも焼けた人もいます。

私は昭和十二年阪神の水害と大きな事故に遭つた。そして軍隊へ行き、生きて帰り、内地帰還後空襲にも

遭つたが助かった。さらに、平成七年一月の阪神・淡路地震の時に焼け、妻は家の下敷きになり、未だに病院へ通っています。私は軍隊で粘り強い負けじ魂で強くなつたと思います。人生は悪い面ばかりではない。戦犯のみが悪いのではなく、A級戦犯は気の毒であると思います。

災害はいつ、どこで起こるかは分からない。悪いこととは何でも、他の人のせいにするのは良くない。自分も責められることもある。私は軍隊での負けじ魂、戦友愛、困難に勝つ粘り強さこそ、私の人生を救つてくれたと今でも思っています。

### 三回の召集に生き残り

#### 八十七歳でも青年

秋田県 佐々木 隆治郎

私は大正二（一九一三）年十二月十七日農家に生まれたのですが、明治末期から大正時代に入って三代目